泣きぼくろは本当に魅力的？

○北神慎司[1]・岡崎七美[1,#]・井関紗代[1,2]・武野全恵[1,2]
([1]名古屋大学大学院情報学研究科・[2]日本学術振興会)
キーワード：顔の魅力，泣きぼくろ，対称性

Is a face with a mole under the eye really attractive?

Shinji KITAGAMI[1], Nanami, OKAZAKI[1,#], Sayo, ISEKI[1,2], and Masae TAKENO[1,2]
([1]Graduate School of Informatics, Nagoya University, [2] Japan Society for the Promotion of Science)
Key Words: facial attractiveness, mole under the eye, symmetry

目　的

顔の魅力の規程因の一つに，対称性 (symmetry) が挙げられる．進化心理学的には，配偶者選択の上で，顔の構造が左右対称であることは，その持ち主が発生過程で有害な物質に晒されず，十分な栄養状態にあったことを指す発達的安定性（developmental stability）の指標とされ，また，左右対称に諸器官を発現することを可能にする遺伝的情報のシグナルであるとされる (Gangestad et al., 2010) ．その一方で，「泣きぼくろ」という言葉が象徴するように，ほくろは，顔の対称性を妨げるものであるにもかかわらず，魅力的であるとされる場合が洋の東西を問わずに存在する．Springer et al. (2007) は，顔のさまざまな位置にほくろを配置し，魅力度評価を行った結果，もっとも魅力的であると評価されたのは，ほくろのない顔であったものの，その次に魅力的であると評価された顔は，いわゆる泣きぼくろがある顔であり，他のほくろのある顔などに比べても，より魅力的であると評価されている．

しかしながら，泣きぼくろは，本当に顔の魅力度を高めるのであろうか．その背景には，「泣きぼくろがある顔は魅力的である」という一種のスキーマが働いている可能性が考えられる．そこで，本研究では，魅力度評定の前に，例示とともに，あえて，「泣きぼくろのある顔は魅力的である」という教示を明示的に行うことで，泣きぼくろは本当に魅力的かどうかを検討した．

方　法

参加者：大学生 86 名（女性 32 名，男性 54 名）が参加した．
デザイン：泣きぼくろ（あり・なし）の 1 要因参加者内計画
刺激：日本人女性の首から上の顔写真 26 枚（すべて正面向き，中性表情，モノクロ）と，それぞれの顔の，向かって右側の目の下付近に泣きぼくろを付ける加工を施した顔写真 26 枚の計 52 枚．
手続き：参加者は，例示（泣きぼくろのある女優の顔の提示）とともに「泣きぼくろは一般的に魅力的なものとされている」という内容の教示を受け，左右の位置に同時に提示された「泣きぼくろあり顔」と「泣きぼくろなし顔」のうち (Figure 1) ，より魅力的だと感じるほうに 1（やや魅力的）～5（非常に魅力的）の 5 段階で評定した．計 26 対の顔写真に対する魅力度評価を終えた後，「実験を受ける以前から泣きぼくろを魅力的と思っていたかどうか」などの事後質問に回答した．

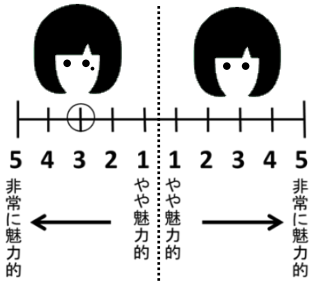

Figure 1.　魅力度評価の例

結果と考察

まず，泣きぼくろなし顔の方が魅力的であると評定されたデータを 0，泣きぼくろあり顔の方が魅力的であると評定されたデータを 1 に変換した後，刺激ごと選択率を算出し，1 サンプルの t 検定を行った．その結果，泣きぼくろあり顔の選択率は全体の 53.4%であり，これはチャンスレベル (50%) よりも有意に高い選択率であった (t (25) = 3.22, p = .004, d = .63)．つまり，全体として，泣きぼくろのある顔の方が，より魅力的であると判断されていることが示された．

さらに，「実験を受ける以前から泣きぼくろを魅力的と思っていたかどうか」という事後質問に対して，「はい」と回答した参加者（27 名）と「いいえ」と回答した参加者（47 名）の刺激ごとの選択率を比較するため，対応のない t 検定を行ったった．その結果，Figure 2 に示したとおり，以前から泣きぼくろを魅力的と思っていた参加者(M = 0.62, SD = 0.21) の方が，思っていなかった参加者 (M = 0.49, SD = 0.17) に比べて，泣きぼくろあり顔の選択率が有意に高かった (t (72) = 2.93, p = .005, d = .56)．すなわち，以前から泣きぼくろのある顔を魅力的であると思っていた参加者の方が，本実験においても，泣きぼくろのある顔を，より魅力的であると判断していたことが明らかとなった．

前述の通り，Springer et al. (2007) とは逆に，本実験では，全体として，泣きぼくろのある顔の方が，泣きぼくろのない顔よりも，より魅力的であると判断された．このような結果が示された理由の一つは，魅力度評価を行う前に，「泣きぼくろは一般的に魅力的なものとされている」という教示を明示的に行ったためであると考えられる．この考察は，「以前から泣きぼくろを魅力的と思っていたか？」という質問に「はい」と答えた参加者の方が，泣きぼくろのある顔をより魅力的であると判断しているという結果によって支持されるものである．すなわち，「泣きぼくろスキーマ」の活性化によって，顔の魅力の判断が変動したに過ぎないと考えられる．

引用文献

Gangestad, S. W. et al. (2010). *Animal Behaviour*, *80*, 1005-1013.
Springer, I. N. et al. (2007). *Annals of plastic surgery*, *59*, 156-162.

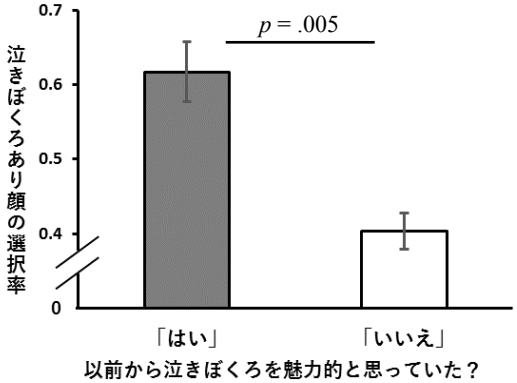

Figure 2.　事後質問の回答ごとの選択率（エラーバーは SE）